

2015年7月26日 第四主日礼拝

説教「神さまの面接」

サムエル記第一 16章 6-13節

【神さまの面接】

ダビデが神さまに見出されるという、わくわくするような面接です。けれども、この面接はサウルを退けなければならなかった神さまの悲しみから始まったことを忘れてはなりません。「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか」(1)とサムエルに言いながら、悲しんでいるのは神さまも同じでした。そんな中で「私たちは悲しんでいることはできないのだ。前に進まなければならないのだ。歴史を拓いていかなければならないのだ。イスラエルのために、そしてイスラエルを通して世界を祝福するために。」と、おっしゃったのでした。こうして始まった面接の基準は「【主】は心を見る」(6)、すなわち心でした。

【サウルの心、ダビデの心】

神さまが見てよしとされたダビデの心はどのような心だったのでしょうか。それは神さまに悲しまれたサウルの心と比べるとはっきりとわかります。サウルは神さまに従わないで、罪を犯しました。でも、罪人というのならダビデも同じ。いえ、サウルよりもはなはだしい罪を犯したと言えるかもしれません。バテシバ事件です。2人のちがいは、罪を犯したあとの振る舞いにあります。2人とも罪を犯したときに

預言者が遣わされて来ます。サウルにはサムエル、ダビデにはナタン。サウルは罪を認めません。あくまで自分は神さまに従っていると言い張るのです。

「人には恥ずかしい心のひとすみがある。そして神さまはそこでしか会ってくださらない」という言葉があります。つまり、私たちが、自分でも恥じ入る他ない罪に気づくとき、そのときが、神さまにお目にかかるほんとうのチャンスなのです。どんなに神さまについて考えたところで、あるいは、良い行いに励んだところで、それでは、神さまに会うことはできません。神さまに会うことは意外にも、私たちがもう自分はだめだ、こんな罪人は滅びるしかない、と、恐れにおののき、身の置き場もないように感じて、身をすくめるそのときなのだということです。

それは罪に気づいて身もだえする私たちに、神さまの愛が豊かに現れるからです。滅びを覚悟した私たちに神さまはこうおっしゃいます。

「そうだ。確かにお前は罪を犯した。だから滅びなければならない。けれどもわたしは、あなたの滅びを見ることに耐えることが出来ない。だからあなたの滅びはわたしが受け持とう。あなたの罪をキリストに負わせよう」とそう言って、御子イエス・キリストを十字架に架けてしまわれました。

サウルが罪を犯したとき、それは、サウルにとってチャンスでもありました。神さまにお会

いし、神さまを深く知って、神さまを愛する王になれたはずでした。神さまがごらんになって良しとされる心をもつことができたはずでした。でも、サウルは失敗しました。

ところがダビデはちがいました。ナタンに責められや、「私は【主】に対して罪を犯した」(サムエル下 12:13)と、神さまに対して罪を犯したことに気づいたのでした。神さまのお心を痛めて、悲しませてしまったことを悔い、悲しんだのです。ナタンを通しての神さまの答は、「【主】もまた、あなたの罪を見過ごして下さった」でした。ダビデは、神さまに受け入れられ、深いところで神さまにお会いできたのです。

ダビデの心とは、このような心でした。罪を犯さない心というわけではありません。そうではなくて罪を悲しむ心。神さまを悲しませることを悔いる心。そしてそこから生じる神さまを愛する心です。

【私たちの心】

私たちにも恥ずかしい心のひとすみがあります。私たちのまわりの人々も、みな神さまの光を必要としています。このひとすみを照らしていただいて、深いところで神さまと出会い、他の人々とも出会いたいと思います。「さあ、この者に油をそそげ。この者がそれだ。」(12)のみことばは私たちにも語られています。神さまは喜びをもって、そう言ってくださっているのです。